瞑想紀行

シチリアの光と音

髙山　博

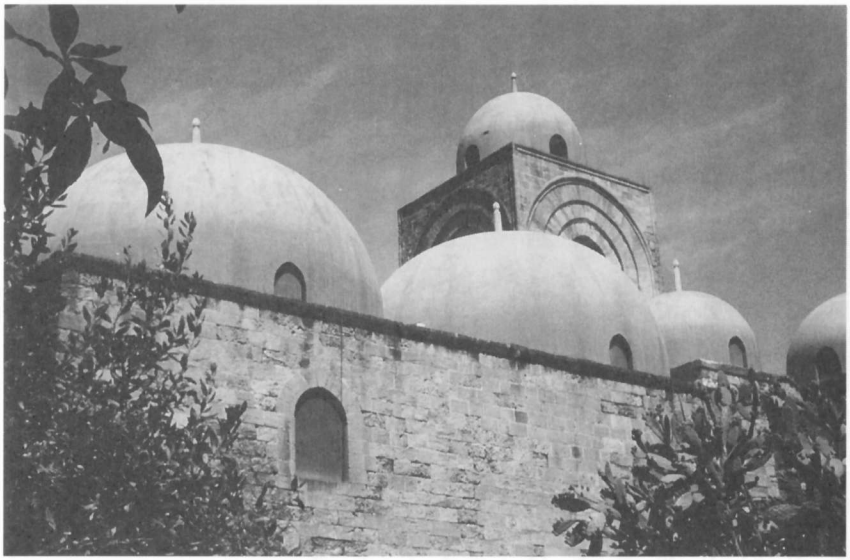
日本を離れて海外に居を移すと、いろいろな驚きがある。見るもの聞くもの、その多くが日本と異なっている。気候や風土、町並み、そこに住む人々の生活様式、それらの違いは十分覚悟していても、時に予想外の驚きに出会うことがある。

私の場合、海外生活で最も印象に残っているのは、明かりの使い方の違いである。アメリカ、イギリス、フランス、イタリアに住んだときには、日本で生活していた時とは随分違った照明の下で暮らしていたように思う。オフィスでは蛍光灯が煌々と照らしていたとしても、家に帰れば光を落とした落ち着いた空間が広がっている。天井に大きな蛍光灯をつけて部屋全体を明るくする日本とちがって、多くの部屋が間接照明によって陰影をつけられている。

友人の家に招待されたときには、いつも蝋燭が活躍していた。もともと暗い照明をさらに落として、蝋燭の光で食事をする。フランスの友人の家では、それに加えて暖炉の火が温かみを増していた。レストランの中には、メニューを読むのに懐中電灯を頼みたくなるほど思いきって照明を落としたところもある。

私が頻繁に訪れるシチリアの場合も、事情はあまり変わらない。ただ、この島で本当に驚かされるのは、家の中の明かりではなく、街なかの照明効果、昼とはまったく異なる夜の風景である。

シチリア島の中心都市パレルモは、ギリシア、ローマ、



サン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会　写真撮影 筆者

ゲルマン、イスラーム、ビザンツ、ノルマン、フランス、スペインなど、さまざまな民族の支配下に置かれたため、異なる文化に属するすばらしい遺跡を数多く残している。たとえば、旧市街を歩けば、美しいモザイク画で飾られた王宮礼拝堂（カッペッラ・パラティナ）やルッジェーロの間をもつノルマン王宮、赤い丸屋根を載せてイスラムのモスクを思わせるサン・カタルド教会やサン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会などの美しい建物を見ることができる。

しかし、その一方で、街を歩けば、そのような美しい史跡とは対照的な、崩れ落ちた廃屋、古ぼけた建物の壁の落書き、洗濯物が干してある裏通り、など、決して美しいとは言えない風景がある。

それが夜になると一変するのだ。パレルモには何度も行ったが、特に夏は印象的だ。暑苦しい昼は人通りも少なく、街は死んだようになっているが、日が暮れると人が動き始め、街はざわめきに包まれる。昼間閉じていた店が開き、客の賑わいは夜遅くまで続く。

今から十数年前のことだが、そのような夜に、古くか

らの友人ジャンニとフレディと街を歩いたことがある。その記憶は今でも鮮明に残っている。ジャンニは当時パレルモ大学教授（現在はローマ大学教授）、フレディはミラノ大学教授だった。二人ともパレルモに住み、フレディはそこからミラノに通っていた。

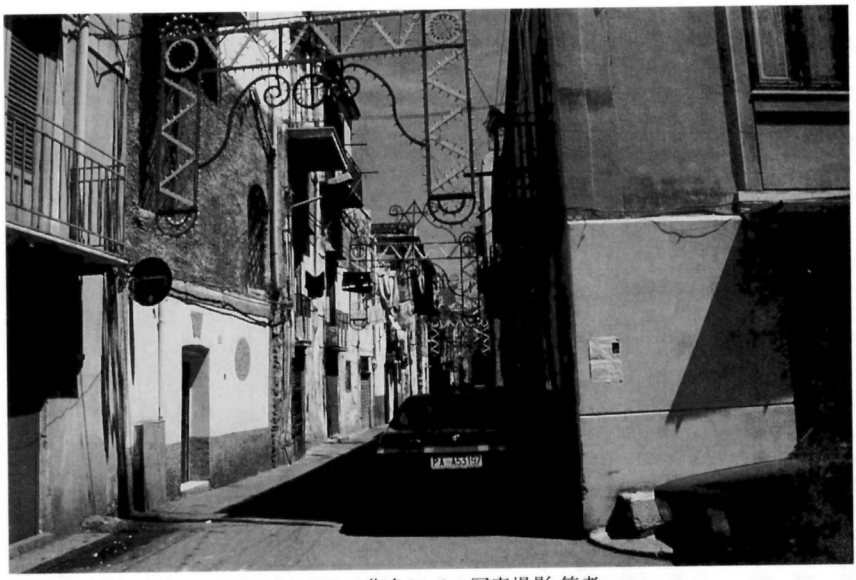
昼間無表情だった城壁が、ライトアップされて、独特な雰囲気で浮かび上がっている。その城壁の歩道を、夜十時だというのに、たくさんの人々が歩いている。昼間の人の少なさを考えると、いったいどこにそんなに多くの人がいたのかと不思議に思われてくる。

私たちはその城壁を見ながらレストランに向かった。昼間通ったときにはスラムと見まがうばかりだった通りが、まったく別の顔を見せている。崩れかけた壁も落書きで汚れた壁も闇に隠れ、照明に浮かびあがった通りは、アラビアン・ナイトの「アリ・ババと四十人の盗賊」で盗賊がアリ・ババの家を探して歩いた町並みを髣髴とさせる。

辿り着いたレストランは、昼間通った時には何の変哲もない古ぼけた建物だったが、今は通り一面にテーブルと椅子が並べられ、それぞれのテーブルに蝋燭が灯されている。店の前の巨木には照明があてられ、白い幹と緑色の葉が浮かび上がっている。この植物はフィクス・マグノリオイデス（ficus magnolioides）。横に伸びる大きな枝から垂直に多くの根を地面へ下ろす熱帯植物だ。南国にある不思議の国のレストランにきたかのような錯覚を覚えた。

このレストランで、カラマリ（イカのから揚げ）から始まるおいしいシーフード料理を堪能し、楽しい時間をすごしたあと、私たちは近くの教会へ向かった。この教会は十六世紀に建てられたものだが、天井を作る前に工事が止められ、結局完成することなく長い間放置されていた。天井がないため、昼間見ると、まさに無残な廃墟といった趣きである。ところが、この夜は、そこでジャズ・コンサートが開かれていた。

昼間は、廃墟の一部をなす壁と柱にしかすぎなかった石材が、明かりに照らされて、まるで神殿のように神々しく見える。漆黒の闇の中に浮かび上がる白い神殿、そして、その神殿の中で演奏されるジャズ、それを楽しむ聴衆。まさに夢心地で、ジャズの演奏を聞いていると、



パレルモの街角にて　写真撮影 筆者

私は、突然、心がタイム・スリップしたかのように、スペインのグラナダにあるアルハンブラ宮殿を思い出した。

私たち夫婦は今年四月で銀婚式を迎えるが、今から二五年前、新婚旅行の地として選んだのはスペインだった。初めての海外旅行だったのでパッケージ・ツアーを探したが、当時、旅行会社の企画にシチリアは含まれておらず、シチリアと同じように中世にイスラム文明とキリスト教文明が交差したスペインへ行くことにしたのである。

グラナダでは、昼間、アルハンブラ宮殿を見て、その精緻な美しさに感動したが、聞けば、四月から夏の期間は夜間も開いているという。夕食を済ませて、夜、再度アルハンブラ宮殿を訪ねた。その日は月夜ではなかったが、抑えた照明に照らされた宮殿は、まるで月の光に照らされたアラビアン・ナイトの宮殿のようだった。遠くで聞こえる水音のなか、宮殿が光の中に浮かび上がっている。人気のない空間を歩いていると、時空を一気に超えて、中世の時代に戻ったような気がした。

そう、漆黒の闇の中に白く浮かび上がるこのパレルモ

の教会を見ながら、アルハンブラ宮殿の記憶が甦ったのである。あの時には、噴水から流れる微かな水音がしていた。それは、ほとんど音と光のない中での静かな「音と光（son et lumière）」の光景だった。

そんなことを思いながら現実に戻ると、しばらく聞こえていなかったジャズの音が聞こえてくる。ここにあるのは、別の形の「音と光」の光景だ。しかし、共通点がある。どちらも、音と光がほとんどない中での、「音と光」のショウだ。そして、コルドバのアルハンブラ宮殿も、この教会が建てられたパレルモのハルサ（アラビア語のハリーサに由来する）区も中世にイスラームが支配した名残なのだ。ジャズの音楽を聴きながらそのようなことをとりとめもなく考えていた。

シチリアは、私の長年の研究対象だが、それと同時に、さまざまな思い出をもたらしてくれるところでもある。この文章を書きながら、再びパレルモの夜を訪れたくなった。

（たかやまひろし・東京大学大学院教授）